

はじめてのアジャイル、はじめての経験

アジャイル初心者向けセミナー
2015年11月27日

インフォテック株式会社
後藤 之稔

発表者紹介

■ 発表者

インフォテック株式会社
後藤 之稔

■ プロフィール

2010年インフォテック株式会社入社
保険会社の支払査定システムの開発に携わり、
現在6年目

目次

- 1. アジャイル型開発導入の経緯
- 2. アジャイル型開発計画
- 3. 7つのプラクティス実施内容
- 4. ふりかえり

1. アジャイル型開発導入の経緯

(1) プロジェクト概要

(2) プロジェクトの問題点

(3) アジャイル型開発の検討

(4) アジャイル型開発の効果予測

1. (1)プロジェクト概要

- ・保険会社の照会系WEBアプリケーション開発
- ・使用ツール・言語: Visual Studio、TFS VB.NET
- ・開発工数: 42人月(設計～結合テストまで)
- ・メンバー: 3～6名 ・作業場所: お客様と同じビル
- ・開発モデル: ウォーターフォール型開発

2015年									2016年		
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
設計フェーズ (外部設計・内部設計)					開発フェーズ				テストフェーズ (結合テスト・ ユーザ検証)		
					開発・単体テスト (機能1)						
					開発・単体テスト (機能2)						
					開発・単体テスト (機能3)						

1. (2)プロジェクトの問題点

- ・リーダーが決めた作業、決めたスケジュールで作業するため、メンバーにやらされている感がある



メンバーのやる気向上が必要！！

1. (2)プロジェクトの問題点

- ・お客様の利用部門の確認、実機を使用しての検証がテストフェーズ後半のため画面の操作性等で変更要望が発生した場合手戻りの工数が大きくなる



**早期にお客様の利用部門との
認識合わせが必要！！**

1. (3)アジャイル型開発の検討

- ・メンバー全員が自発的に作業をできる雰囲気づくり
- ・お客様の利用部門の確認を早期に行い

即座に軌道修正

どうしたら

いいのか??

アジャイル型開発ならば実現できるのでは？

1. (4)アジャイル型開発の効果予測

- ・メンバーのやる気を上げ、積極性を引出す
⇒フラットな開発体制を構築、作業をメンバー自ら選択
- ・お客様の利用部門と早期の認識合わせが可能
⇒各機能ごとにお客様の利用部門との確認を早期に実施することで、変更対応の工数を抑えて取り込みできる

2. アジャイル型開発計画

- (1) アジャイル型開発の提案活動
- (2) アジャイル型開発の一部導入
- (3) 使用プラクティスの選定

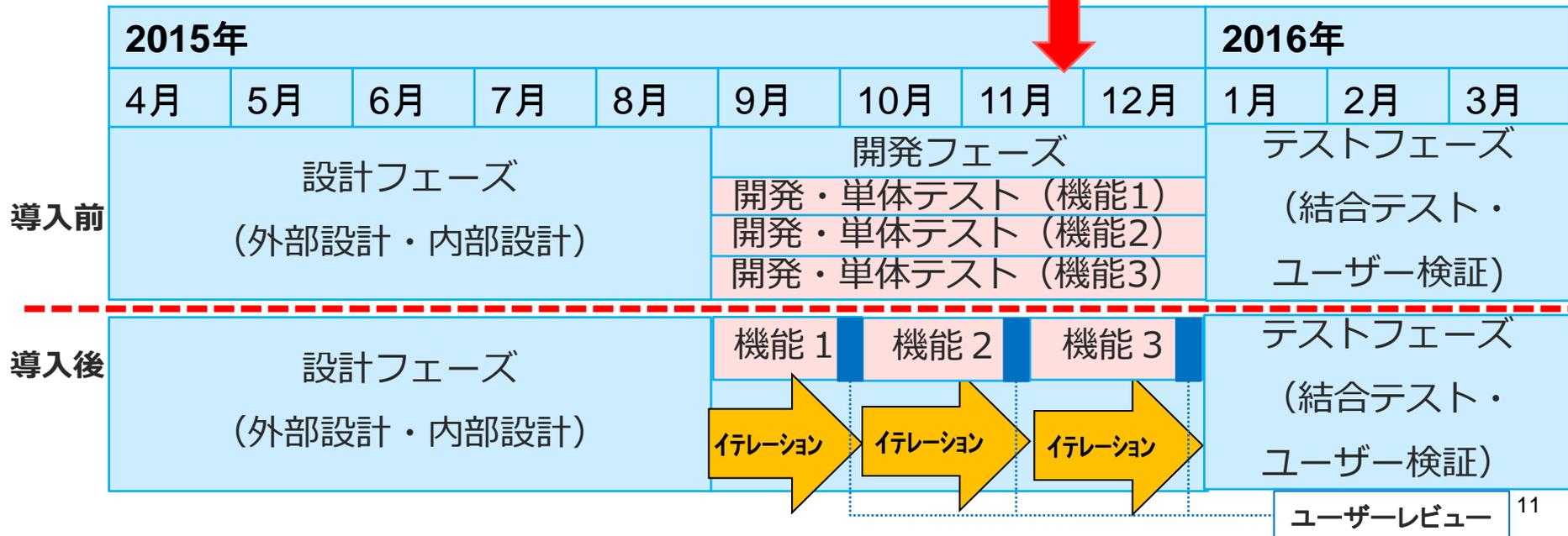
2. (1)アジャイル型開発の提案活動

活動年月	活動内容
2015年4月	アジャイルJAPANに参加
2015年5月	アジャイル型開発の提案のため、3冊の書籍を購入&読み込み (書籍 ①アジャイル開発とスクラム、②アジャイルサムライ、 ③ハイブリットアジャイル開発の実践)
2015年6月	アジャイル型開発のお客様(システム部門)提案① アジャイル型開発の概要について
2015年6月	アジャイル型開発のお客様(システム部門)提案② アジャイル型開発を行うメリットについて
2015年6月	アジャイル型開発のお客様(システム部門)提案③ アジャイル型開発を当プロジェクトで実施した場合の効果説明
2015年8月	アジャイル型開発の一部導入の決定
2015年8月	アジャイル型開発のセミナーに2回参加(スクラム技法)

2. (2)アジャイル型開発の一部導入 導入内容

- ・対象範囲は開発フェーズに限定
- ・新しいツール等の導入はなし
- ・1機能1イテレーション

アジャイルジャパン発表



2. (3)使用プラクティスの選定

問題1：メンバーのモチベーション低下

問題2：お客様の利用部門との認識相違

※○：問題解決の対象

NO	プラクティス名	問題1	問題2	期待効果
①	朝会	○		コミュニケーション強化
②	バーンダウンチャート	○		作業時間への意識向上
③	タスクカンバン	○		積極性の向上
④	ペアプログラミング	○		快適な作業環境の構築
⑤	自動テスト	○		テスト工数削減
⑥	ユーザーレビュー		○	早期問題の把握、変更の取り込み
⑦	ふりかえり (KPT)	○		各プラクティスの改善策考案 次イテレーションへのやる気向上

3.7つのプラクティス実施内容

- (1) 実施・効果・問題・改善（1イテレーション目）
- (2) 改善策の評価（2イテレーション目）
- (3) 問題点と改善策（2イテレーション目）

3. (1)実施・効果・問題・改善（1セッション目）

①朝会

■ 実施概要

前日の作業内容・当日の作業予定・課題の報告、
確認（毎日9：30～9：45）

■ 効果

メンバーのやる気がアップ！！

■ 問題点

作業時間が減ってしまった↘↘

■ 改善策

報告内容の簡素化

3. (1)実施・効果・問題・改善（1セッション目）

②タスクカンバン

■ 実施概要

タスクをチケット化（付箋）し、貼り出す
朝会の場でタスクを各メンバーが取得

■ 効果

メンバーの積極性アップ！！

■ 問題点

当日のチケットで未着手の作業がでることがあった↘↘

■ 改善策

カンバンの設置場所確保

朝会で取得するタスクは1つに絞る

3. (1)実施・効果・問題・改善（1イテレーション目）

③バーンダウンチャート

■ 実施概要

毎日の実績をグラフ化し、タスクカンバンに貼り出す

■ 効果

チームのメンバーとしての
意識が高まる！！

■ 問題点

バーンダウンチャート作成に
時間がかかる↘↘

■ 改善策

ツールを作成し、チャートの作成を自動化する

3. (1)実施・効果・問題・改善（1セッション目）

④ペアプログラミング

■ 実施概要

2人組のペア（若手＋開発経験豊富なメンバー）を作り
ペアでプログラミングをする

■ 効果

若手メンバーのスキルアップ！！

■ 問題点

ペアプログラミングする時間がとれない↘↘

■ 改善策

作業時間が合いやすいペアに入れ替える

3. (1)実施・効果・問題・改善（1セッション目）

⑤自動テスト

■ 実施概要

開発したモジュールのテストコードの作成とテストの実施

■ 効果

テスト工数を削減！！

障害等の修正時の品質確保！！

■ 問題点

自動テスト作成に時間がかかる↘↘

■ 改善策

自動テストもペアプログラミングする

3. (1)実施・効果・問題・改善（1イテレーション目）

⑥ユーザーレビュー

■ 実施概要

お客様の利用部門が、1イテレーションで開発した機能に対して実機による動作確認をおこなう

■ 効果

お客様の利用部門がすぐに問題・変更要望をあげられる！！
すぐに対応することで無駄な工数が発生しない！！

■ 問題点

ユーザーレビューの日程調整がうまくできない↘↘

■ 改善策

お客様の利用部門とのコミュニケーション強化

3. (1)実施・効果・問題・改善（1イテレーション目）

⑦ふりかえり

■ 実施概要

K P T (Keep, Problem, Try)を活用して
イテレーション単位での振り返りを実施

■ 効果

次のイテレーションで改善策を
すぐに実施！！

新たな取り組みにも
すぐにチャレンジできる！！

■ 問題点、改善策

問題なし、改善不要

3. (2) 改善点の評価 (2イテレーション目)

NO	プラクティス名	改善策	実施結果	
①	朝会	報告内容の簡素化 大きな課題は別途調整	○	15分で完了できた ⇒作業工数の削減
②	タスクカンバン	タスクは1つ タスクカンバン常設	○	最新状況の共有 ⇒作業効率化
③	バーンダウン チャート	ツールによる自動化	○	自動作成できた ⇒作業時間削減
④	ペア プログラミング	ペアの変更	○	ペアプロ実施率向上 ⇒作業効率化
⑤	自動テスト	ペアプロの実施 ルールの明確化	○	自動テストもペアプロ実施 ⇒作業効率化
⑥	ユーザー レビュー	お客様の利用部門との コミュニケーション強化	×	毎日話すことはできなかった ⇒3イテレーション目で 改善策を実施中
⑦	ふりかえり	特になし	-	特になし

※○：改善策実施（効果あり） ×：改善策未実施（効果なし）

3. (3) 問題点と改善策 (2イレーション目)

NO	プラクティス名	問題点	改善策
①	朝会	特になし	特になし
②	タスクカンバン	誰がどのタスクを 終わらせたのかわからない	作業実績の取得
③	バーンダウン チャート	全体スケジュールが わからない	マスタースケジュールを カンバンに設置
④	ペア プログラミング	特になし	特になし
⑤	自動テスト	特になし	特になし
⑥	ユーザー レビュー	日程調整がうまくいかない	ユーザーとの コミュニケーション強化
⑦	ふりかえり	特になし	特になし

4. ふりかえり

- (1) 問題点に対しての解決評価
- (2) 今後取り組みたいこと

4. (1) 問題点に対しての解決評価

<問題 1 >

- ・メンバーのやる気向上が必要！！
⇒メンバーが自発的に作業できるようになった
受け身だったメンバーが積極的に！！

<問題 2 >

- ・早期にお客様の利用部門との
認識合わせが必要！！
⇒開発フェーズ期間内に実機確認ができた
開発期間内で利用部門の変更要望を取り込み！！

4. (2) 今後取り組みたいこと

- ・ お客様の利用部門を巻き込んだ
アジャイル型開発の実施
- ・ 他プロジェクト、他案件へのプラクティス活用
- ・ アジャイル型開発を使用する判断基準の策定

ご清聴いただきありがとうございました